

おばさん

ある学校用務員の記録

おばさん

ある学校用務員の記録

昭和四十二年九月一〇日 初版発行

定価 四〇〇円

著者 大塚 静子

発行者 永井 雅明

発行所 株式会社 共文社

東京都千代田区西船田三ノ八ノ七
電話 (六三) 二五五三・振替東京六〇六
印刷・三美印刷 製本・永沢製本

おばさん

ある学校用務員の記録

大塚 静子

共
文
社

まえがき

私の夫は九年前、ガンで亡くなった。それまで近所の親しい人たちから「町内の幸せの代表」と言われていた私は一挙に「不幸の代表」に転落してしまった。夫の死後二か月間は悲しいことの連続で、私の涙は完全に出つくしてしまった。強い感動のために思わず涙があふれ出ることはあるが、胸がしめつけられるような悲しみの涙は、もう私にはない。

当時三十五歳だった私は、三人の女の子をかかえて上京し、しゃにむに生活と戦ってきた。結婚するまで看護婦をしていたので、その経験を生かして、派出看護婦、学校養護婦、ホームヘルパーなどの職を転々としながら、無我夢中で働いてきた。しかし、何年勤めても身分の保障はなく、生活も安定しないので、思いきって都立の学校の給食作業員になり、そして都立高校の用務員にかわった。

まえがき
現在私の勤めている学校は、都心に近いところにある都立工業高校の定時制で、約五百名の生徒が、昼間働きながら夜学んでいる。はじめは目がまわるほど忙しいと思った用務員の仕事にもなれ、このごろは毎日楽しく働いている。軽はずみで、おしゃべりで、おせっかいの私は、とんでもないことをよくしでかす。

生徒がなぐりあいをしていると、とんで行って仲裁をし、お説教をする。職員旅行の宴会では、校長先生とダンスをしてかっさいをあびる。運動会のフォークダンスでは、男子ばかりの職員、生徒の中に紅一点？の色どりをそえる。先生が欠勤の時には、教室へ出席簿を届けに行ったついでに生徒たちに一席ぶちまくってくる。こんなでしゃばりな用務員は、日本中さがしてもいないかもしれない。いなくてもよい。先生のいない教室で生徒が騒いでいて、他の教室に迷惑をかけるよりはよいだろうと思っている。

*

そんな私が、思いがけないことから生活記録をまとめることになった。昨年六月六日、朝日新聞の教育⁶⁶の「窓」欄に、「用務員の立場から」という私の作文が載った。書くことの好きな私は、時々新聞の投書欄にへたな文を投書していた。

用務員の立場から 先生も本分尽して

給食のお休み時間に、ある先生が「今度受け持ったクラスは悪い生徒ばかりでがっかりしたわ」と言っているのを聞いて、私は「それは教師として楽しみじゃありませんか。卒業するころには、いい生徒ばかりのクラスになったと言われるようにがんばって下さいよ」と言っていました。主人を失って十年。学校の作業員、用務員として、三つの学校に職場を変えました。その間、二百人近い教師に接してきましたが、今度生まれて来る時は、やっぱり女で、そして先生を選びたいと思うようになりました。私がその

ような気持ちになったのは、実は六年ばかり前のことです。

ある学校で男の先生が「女の子ってわからんなあ。昨日、先生、死にたい時はどうすればいいだろうと泣いて来たから、死にたくて死ぬるものじゃないさ。死にたきゃ死ねばいいさと言ったら、その夜、ほんとうに弟と一緒に心中しちゃった」と笑いながら話しているのを聞いて、私はかっとなりました。その前の日に、その先生がタバコをすいながら泣いている生徒と話しているのを見たのです。先生の態度はまるで誠意のない、愛情のない不親切な感じで、その時から私は不満を持っていただけに、とても悲しく、自分が用務員であることさえあわれに思ったものです。

どんな職業でも自分をつくすのが大切だと思います。私は学校にあっては用務員としての自分をつくすような心がけています。廊下を歩いていて窓がよごれていけば、すぐそこをふき、生徒が破れているズボンをはいていけば、へたながらも時にそれをつくらせてやる。家に帰って母の立場にある時は、母としての自分をつくすべく心がけています。教師の方々も、次の世代の原動力になる人間を毎日養成しているのですから、自分の教養を高めつつ、教師としての自分をつくしていただきたいと思っています。

(昭和四十一年六月六日 朝日新聞 教育66「窓」欄に掲載)

新聞に投書が載って数日後、共文社の永井さんが学校にたずねてこられ、「上京後の生活記録をまとめてみないか」と言われた。書くことは好きでも、文章には全然自信がないので、散々迷った。しかし、ふりかえってみて、この九年間、私自身にとっては実にさまざまなことがあった。出版されるようなものはできそうもないが、とにかく書いて、それを見ていただくことにした。

先年、ある小さな新聞に、上京後約一年間の生活記録を連載してもらったことがあるので、その切り抜きや、古い日記、手紙の束などをとりだして書きはじめた。日記といっても三日坊主で、書いてないページの方が多かったり、何ページにもわたってへたな歌が書きつけてあったりで、あまりあてにはならない。記憶の糸をたぐりながら書くのだから、なかなか筆はすすまなかった。文章が未熟で、自分の書きたいことがどうも思うように書き表わせず、途中で何度やめてしまおうと思っただけではない。そのたびに、永井さんに励まされ、子供たちに励まされ、一年間かかってどうにか書きあげた。予定の枚数を大分こえてしまい、編集の方にはいろいろと迷惑をかけることになってしまった。

上京後九年間、私たち一家は、実にたくさんの方々のお世話になってきた。毎日少しずつ原稿を書きながら、あらためて、これらの方々の大きなご恩を思った。養護婦、給食作業員、用務員として勤めたそれぞれの学校の先生方、同僚の作業員、用務員の人たち、母子寮の寮長先生、そのほかお名前をあげるにはあまりにも多い方々に、心からお礼を申しあげます。また、この本の出版にあたってお世話になった共文社の方々に厚くお礼を申しあげます。

（付記）

本書の登場人物の中には、一部、仮名にさせていただいたものがあります。

目 次

まえがき	三
白衣ふたたび（昭和三年一〇月―三四年六月）	一三
上 京	一三
ごめんあそばせ	二三
ベビーブームの産院	二五
眠れぬ一夜	三〇
保健室だより（昭和三四年七月―三五年三月）	三四
気にしない、気にしない	三四
恋をうちあけられて	四〇
しかられたババヌキ	四四
家出した女生徒	五〇
白いハンカチ	五七
小さな幸福	七三

世話好き養護婦（昭和三五年四月―三六年二月）	八
なぐられたキャプテン	二
トイレ掃除婦のスト	九
就職の世話失敗記	四
香坂君とおばあちゃん（一）	六
リバイバルソングの店	三
やめられない三つの仕事	一六
新職業ホームヘルパー（昭和三七年一月―三七年三月）	二七
四人のおばあさん	二七
香坂君とおばあちゃん（二）	四
別れを惜しんで	五
給食のおばさん（昭和三七年四月―三九年三月）	五
「おばさん」騒動	五
お化け屋敷に住む	三

声を出さずに「オハヨウ」	一七三
再婚が女の幸せか	一八〇
パチンコとトースター	一八六
香坂君とおばあちゃん(三)	一九六
用務員も楽し(昭和三九年四月―昭和四二年)	二〇三
がんばれ定時制生徒	二〇三
かゆい話	二一〇
プールサイド物語	二一六
コッペパン事件	二二六
足短かおじさんと清君	二三四
居眠りを許す先生	二四二
モシモシ三枝子さん	二五二

装幀 川崎義一

お
ば
さ
ん

—ある学校用務員の記録

白衣ふたたび
(昭和三年一〇月―三四年六月)

上
京

山手線を走る電車の窓から、私は、東京の街をながめていた。どこかに「派出所看護婦会」という看板が出ていないだろうか、一心にさがしていたのである。何のあてもなく、小さなトランク一つを持って上野駅に着いた私にとって、看護婦の免状だけがただ一つのみであった。電車は山手線を一回りして、また上野を通った。再び、新橋、品川と過ぎて五反田に着いた時、私はあわてて電車を降りた。

五反田には亡くなった主人の叔母がいる。しかし、今の私はちょっと顔出しにくい立場なので、たよることはやめようと思っていた。それなのに五反田に降りてしまったのだ。

「だが、やっぱり人をたやることはやめよう」そう思い直し、ホームで次の電車を待っていた。その時、ホームの向うの建物の屋根の上に、「職業安定所」という看板が出ているのが目にとまった。

改札口を出て、安定所の方に向かって歩いてみると、「鈴村派出婦会」という看板が、目にとびこんできた。安定所に行くのをやめて、その派出婦会を訪れた。丁度日赤中央病院から看護婦の申し込みがあり、家政婦ばかりで看護婦の資格者がいなくて困っているところだった。さいわい、私はその場ですぐ、日赤中央病院へまわされた。こうして、東京での看護婦生活が始まったのである。

婦長さんに連れられて行った担当の病室には、「南条一郎」という名札と、「面会謝絶」と赤く書かれた札がかかっていた。病室に入ると、患者さんの奥さんであろうか、看護やつれしたらしい、顔色の悪い婦人が立ち上がった。

「ああ、来て下さったんですね」

と、ほっとしたように言った。ベッドのそばには大きなポンベが置いてあり、長い管を通して酸素吸入がつづけられていた。

「大塚さんという看護婦さんです。あなたは少し代わってもらってお休みになった方がいいでしょう。あなたが倒れたら大変ですから」

そばの婦人にそう言って、婦長さんは出て行った。患者の南条さんは随分太った男の人で、酸素吸入の管のほかにもう一本、鼻から細い管が胃に差し入れてあり、血液や胃液らしいものが、下のノウボンにたまっていた。重患のようだ。あと何日も保つまいと思われた。私は脈をみながら奥さ

んに話しかけた。

「ご心配ですね。お子さん、いらっしゃるんでしょう?」

「女の子が一人いるんです。看護婦さん、助けて下さい。大丈夫でしょうか。腸が、まるでくさってるんですってね」

「そうですか。二人で一生懸命看護して、どうしても治ってもらいましょうね。お子さんのためにも」

私は急に胸がつまって、涙があふれてきた。二か月前、私の主人も、死を待つ病床で苦しんでいた。私もこの人と同じように、祈るような気持で看護をつづけていたのだ。

*

昭和三十三年八月二十五日、私の夫は、幼い三人の子を残して、胃ガンで亡くなった。長女の三枝子が十歳、次女の二美子が七歳、三女の恵子は四歳であった。夫は、新潟県小出町の材木商の次男で、立派な家を建ててもらって分家し、家業を手伝っていた。私たちの家が父の製材工場のそばだったので、家の一部は工場の事務所になっていた。

お葬式がすんで三日目、その日は夫の初七日であった。夫の両親がたずねてきた。仏様におまいりしたあと、おじいちゃんが言った。

「おしず、お前、いつまで、どあすんで（遊んで）いるつもりだや」

「ええ、どあすんで?」